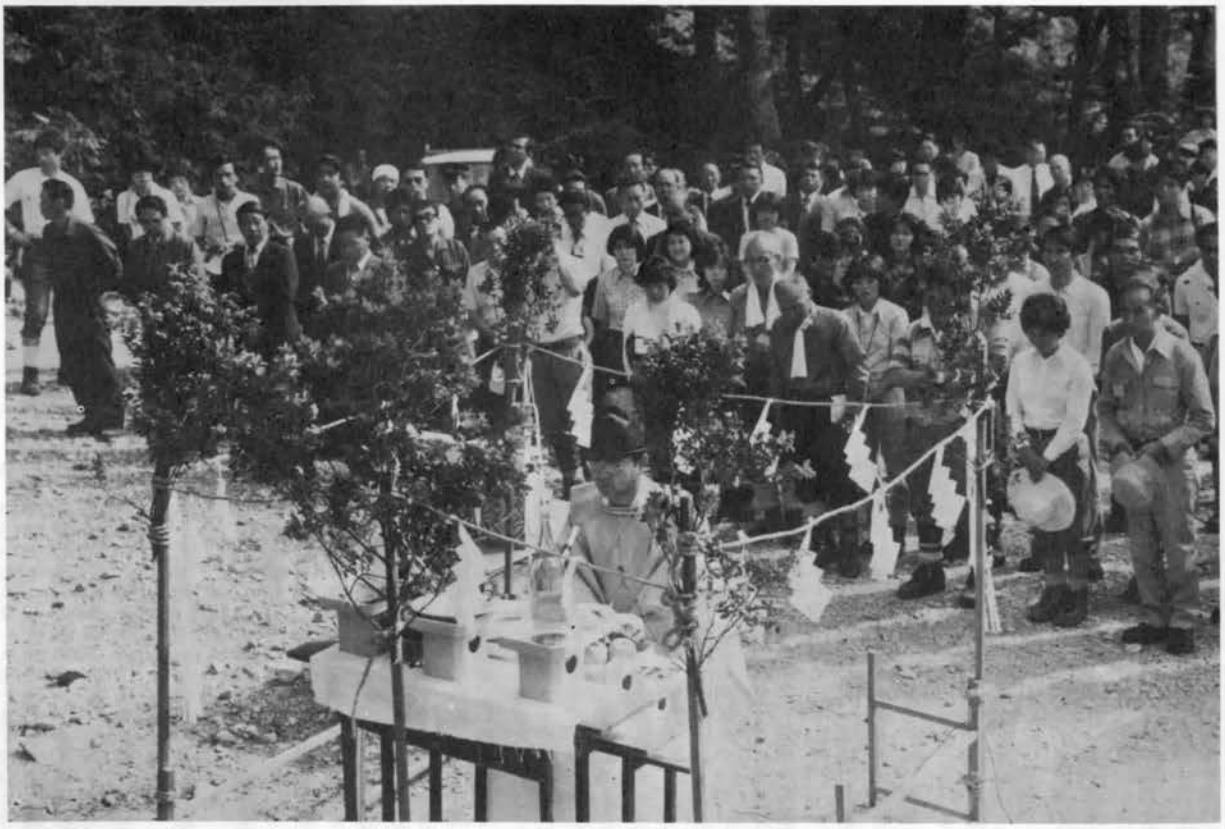
山と博物館

第25巻 第6号　1980年 6月25日　大町山岳博物館



貞逸祭　　提供　白馬村観光課

白馬岳に光と放つ〝貞逸祭〟

松沢貞逸は、白馬岳開発の先駆的な役割りを果たした忘れることのできない先駆者である。今日のスポーツあるいはレジャーとしての登山が雲をつかむような見通しの立たない時代に、彼は山に賭けた。

明治二十四年に当時の北城村四ッ谷（現白馬村白馬町）山木旅館に生まれた彼は、十一才の時、白馬岳に登り、その尊厳に大きな感動を受けた。傍らに残る参謀本部陸地測量部員の宿泊用に造られた粗末な石室が、白馬岳頂上への山小屋建設の情念を駆立てたのだろう。折しも登山が近代化の第一歩を踏み出していた時代である。

明治三十九年に取りあえず先の石室を改造し、小屋の営業を開始した。十六歳の時である。立てば天井に頭がつかえるような小屋だったが、利用者は逐年増加した。大正八年から九年にかけて東久彌宮、三笠宮などの登山が行なわれてから登山者は急増、大衆化に拍車がかかった。神城（現白馬村）飯田の下川芳太郎の案もあり、山木旅館から白馬館に改名したのはこの頃である。

貞逸の発想で、大町に次いで全国で二番目の白馬岳登山案内人組合が結成されたのも、この頃である。登山者受入体制の整備、さらに、当時北城小学校で教べんをとっていた馬場治三郎とともにスキーのメッカを目指して、スキー場の開発も推進した。彼が、頂上に木造二棟の山小屋を建てたのは大正十二年の夏である。三十二歳の働き盛り、近代登山は三期目に入り黄金時代を迎えていた。

大正十五年九月一日、仏崎観音寺参拝へ向う途中、木崎湖へ車もろとも突っこみ、三十八才の若い生涯を閉じた。登山の黎明期を迎え、苦難と嘲笑の中でわずか二十年、短い生涯ではあったが、彼の白馬岳に燃した精魂は白馬岳頂上に建設されたレリーフとともに、〝貞逸祭〟の名を残して、赫々たる光を放っている。

（大町市中原町　中村周一郎）

喜作新道の周辺

三井嘉雄

小林喜作が山案内の初仕事をしたのは、明治三十九年八月であった。

志村烏嶺と高頭式の依頼を引き受けたもので、山中の地理に精通すること、ほかに比ぶべき者もないと見込まれたのである。喜作は、すでにこの頃から評判が高かったことがわかる。このときは、喜作のほかに人夫が五人同行するという大所帯だった。

「常念山脈を越え全く人跡不到の地を辿り、槍ケ岳を極めしものなり。」（『やま』）と志村がいうとおり、一行は燕―常念―槍のルートを通ったもので、燕岳から槍ケ岳へのはじめての縦走者となった。ところが、燕岳の登りの濁沢では、人夫たちは志村たちよりも四十分も遅れてしまった。喜作が足をすべらせて川の中に落ちてしまい、濡れねずみになったために遅くなったものだった。

小林喜作氏　博物館資料

それでも志村たちが燕岳の頂上まで来たときには、夕方の五時に近いころであったが、ここで大変な感激を味わうことになった。「これ所謂如来の御来迎なり。（中略）此際、此時、余等の感情を形容すべき文字なく、言語なし、衆感極まって涙下る。」という。ご来光は、早朝雲海などから陽が出ることをいうのだが、このご来迎の方はブロッケンのことである。霧の中に円形の虹が出て、その中央に人物像の影があったとすれば、当時としては神秘であったブロッケンを見て、志村でなくても如来の出現であろうと考えて敬謙の念に打たれたであろう。

中房温泉から燕岳へは、今は合戦の尾根を登って合戦の頭へ出る道がつけられているが、往時は中房温泉よりさらに上流から、濁沢に入るのが普通だった。志村たちによると、その道は中房温泉から、「浴舎の傍より細径を辿る。二丁許りの間熊笹の密生せる間を上る。行くこと三丁にして楼下滝あり、其の少しく上方より左折して小渓を登る濁沢と言ふ、」と述べている。さらに、その川の水が渋かったことにふれて、「人夫曰く、此上方温泉あり。此の渓水一見清水なれども、其質汚濁を極む。濁沢の名を始めて謂あり。」と、その理由を説明している。

畠山善作によると、中房川のことは湯沢と呼んでいたといい、その湯沢を登って、濁沢から今の合戦の頭である三角点の少し上の草原のところに出たものだという。また辻村伊助は、濁沢と合戦沢の両方とも登れると説明する。それによると、「カッセン沢の方はやや近いけれど、人が余り通らないから路形もなく時間は殆んど違わない。多くは濁沢を登って行く。」（『神河内』）とあるから、明治の末には、合戦沢を登る人もあるにはあったらしい。

合戦沢に林道が整備されたのは、大正五年のことであった。

さて、志村たちと前後して小島烏水と岡野金次郎が燕岳に登り、蝶ケ岳まで歩いている。畠山善作が案内したもので、濁沢の頭に着くまでは参謀本部の陸地測量部の人たちといっしょだった。濁沢の頭というのは、現在の合戦沢の頭のことである。そして、道中で測量官が小島に、高瀬川の湯俣から産出する五角十二面体の石の自慢話をしたため、小島はその測量官のことを五角十二面体君と記している。

陸地測量部による燕岳からの測量は、明治三十五年に終了しているので、五角十二面体君という測量官は、三十九年にこのあたりの三等三角点からの測量を担当した佐々木戸次郎であろう。八月から九月にかけて、赤岩岳や牛首岳、それに蛙岩の西にある二二六七メートルの三角点などから測量をやっている。

話はそれるが、測量隊の登山のときアクシデントがあって、その結果、燕岳の高瀬側の谷に団恵の名が残ることになった。

この団恵谷は、地図によっては川九里沢と呼ばれているが、正しくは燕岳から落ちるのが団恵谷で、川九里沢というのは、蛙岩の南から流れる谷のことをいう。

そして、川九里沢の初通過者は十二才の少年である。郵船会社の中野という人と、その子息がこの谷を下ったのだった。燕岳から湯俣へ出ようというもので、このとき案内をした畠山善作は蒲団まで背おって持って行ったという。

登山史では、団恵谷の初下降は昭和十年の吉沢一郎の一行だということになっているが、それより前、昭和二年には旧制松本高校の一行と中山彦一が通ったともいわれている。

燕岳は槍ケ岳への一方の玄関口である。大正の初期、槍ケ岳へ向かう登山者はほとんどが燕岳を起点とする有明口から登り、上高地から登ったのは一割ほどだったと、穂苅三寿雄は回想している。燕岳の頂上から見た風景が登山者に与えたものは、古今とも絶大であろう。大正五年にここに来た松方三郎もそうであった。

「そして、そこから高瀬の谷ごしに見た槍ケ岳。これではっきりと勝負がついた。もしその時、たった一人でそこにいたのだったら、地べたに手をついて拝んでいたかも知れない。」（『山ときどき』）

その松方は、大正十年一月に、スキーではじめて厳冬期の燕岳に挑み、そして成功を納めている。これは山崎深造と組んだ学習院パーティーで、なお驚いたことに、輪かんじきでついてきた畠山善作が、松方たちのスキーに遅れをとらなかったという。

ウォルター・ウェストンとフランセス夫人が、中房温泉から燕岳を日帰りしたのは、大正元年八月であった。熊笹につかまり、木の枝をたぐって登りに五時間、下りに三時間かかっている。ウェストンはその前日、有明山にも登ってきたが、そのころは燕岳から縦走をはじめる登山者が、足ならしのため必ずといってよいほど登っている山であった。

餓鬼岳への初登頂の記録は、J・ゴースデンとH・ドーントによるもので、大正五年の夏のことであった。中房温泉から中房川を登りつめて東沢乗越に出て、稜線づたいに餓鬼岳に登っている。乗越までは道らしいものもあったが、その先は、「案内者のたゆまない労力によって、下草に道を開いたり、回り道をつけたりして私たちは次第に頂上のリッジへ近づいた。」（『餓鬼岳』）としている。

記録上次に餓鬼岳に登ったのは、大正七年の葛原薗と百瀬彦一郎によるものだった。燕岳の賜わいとは対照的に、餓鬼岳の静けさは

格別で、存外、北アルプスで最後に残る秘境はここではないかと思うときがある。

さて、大天井岳の中腹から槍ケ岳に向けて稜線づたいに通る道、いわゆる喜作新道が一応開通したのは、大正九年であった。一応、ということについてはあとで述べるが、大正九年十一月一日の『信濃毎日新聞』には、次のように出ている。

「日本アルプス大天井岳より東鎌尾根を経て槍ケ岳に達することは従来最も至難とされ、之を通りし者は極めて稀なりしが、今回信濃山岳会員の百瀬彦一郎氏等の尽力にて、大天井より槍ケ岳の殺生小屋へ通ずる近路を開鑿したり。右に付き百瀬氏森林主事小吹氏外二人の一行は去る二十六日中房温泉を出発し、新登山路を辿り、二十八日上高地に出でたり。」

この記事は続けて、赤沼千尋が燕岳へ山小屋の建設に着手すること、信濃山岳会では、この登山路を記入した地図を発行予定していることを記している。

この新道の計画は、喜作が自分の経験から槍ケ岳まで一日短縮して行けるコースとして、百瀬彦一郎に実現の協力を求めたものだった。そして、その九月に現地調査に出かけているのだが、大天井岳まで来た一行は、「それから後は文字通り先人未踏に近い偃松の大樹海で、一歩踏み込めば進むも退くも容易なことではない。さすがに山の王者喜作老の行動は、鉈を振りつつ、偃松の枝を伏り払っては足場をつくって易々と進行して行くが、我々素人はこれに追随するのに死物狂いである。」（『信濃往来』）というほどだった。

だが、この尾根も通る人が全くなかったわけではなかった。鵜殿正雄が明治四十二年に、穂高―槍の初縦走を成しとげたとき、烏川の猟師が、槍ケ岳から大天井へは尾根づたいに行くことができるが、偃松が茂っているので困難だということを聞いている。烏川の猟師とは小林の喜作のことなのか、横沢類蔵を指すのだろうか。

翌四十三年、この尾根に貴重な記録が生まれた。辻村伊助が葛温泉から猟師を案内に立てて高瀬川を溯り、天上沢をつめて東鎌尾根を越え、槍沢側に下ったものである。槍ケ岳には登らなかったが、水俣乗越の記録上の初通過者で、しかも水俣乗越の名はこのときの命名である。そればかりではなかった。どうも、東鎌尾根の名も辻村によるものらしい。それまでは単に鎌尾根と呼ばれていたのを、槍ケ岳の北にある鎌尾根と区別するために、こちらを東鎌尾根としたものだという。

百瀬慎太郎の一行が、大正八年の夏に同じ道を水俣乗越に来たときも、もちろん喜作新道は拓かれる以前だった。

東鎌尾根に足跡を記録した最初のものを捜すと、それは北尾鐐之助によるもので、大正二年七月のことであった。案内をした横沢類蔵が、かつて一度この尾根を通った経験があるといい出したために、分水嶺を通ってみることにしたのである。このときの山行は『日本山岳巡礼』によると、大天井岳から、「赤岩岳の尾根は、断岩峭壁、今まで来た屏風を嶺に比すべくもない。道―道と告ぐべきものはない―は頂上から南側の谷に急傾斜を、草ばみに撰んで横に横にと縫って行く。」としている。途中に一坪ほどの雨水の水溜りがあって、濁っていて臭気さえあったが、飯桶（めんぱ）に二杯も飲んだという。それから、「暫く行くと、急に類蔵の姿は、右側の匍ひ松の波に泳ぎ入った。槍の沢へはここから一直線に下るより方法はないといふ。それは、道として換るべきものは全くなく、垂直に立てられた岩壁に、無類の偃松が生ひ出でて、ただ濃緑の布を懸けたやう、それを、偃松の枝に吊り下りながら、下へ下へと下りるのだといふ。」

それから三年して、慶応の山岳部も同じ道を辿り、西岳から槍沢へ下っている。今は通れないが、西岳と槍沢の間には後に登山路が拓かれた。それにしても、西岳から槍ケ岳の鎌尾根は、どうやっても尾根通しには行かれなかったものとみえる。このときは畠山善作が案内を務めたが、フデバミの辺りは熊が出たので、時々彼は猟に来ていたといっている。

また、穂苅三寿雄も西岳から筆喰みを越えて大天井岳に出たことがあった。大正八年のことで、槍沢から入って西岳と赤沢岳の鞍部にとりつき西岳に登ったもので、同行した小林喜作によると、東天井岳の二ノ俣小屋から筆喰みまでかよって、熊やクラシシが出るのを待つのだと説明している。常念小屋が営業をはじめたのはこの年のことで、はじめは常念坊と呼ばれていた。その小屋の南脇には、四畳半ほどのムシロ張りの物置小屋があったが、これは測量隊が作った小屋である。二ノ俣小屋は、この常念小屋ができるまでは重要な存在であった。今でも縦走路の傍に、二ノ俣小屋のコンクリートの残骸が残っている。

さらに、志村鳥嶺も東鎌尾根に立った一人だった。例の燕岳から歩いたときのことで、槍沢の坊主の岩小屋に泊って槍ケ岳に向ったが、彼だけは人夫一人をつれて懸崖を登り稜線に出た。写真を撮影しようと試みたもので、このとき槍ケ岳と大天井岳を写している。

数年して、ウエストンも同じあたりを登って、槍ケ岳の穂先を東北の側から納めている。

東鎌尾根に、いよいよ新道が開通する運びとなったのが、先にもあった大正九年もシーズンオフのことなのだが、どうしたものか、それから一年ほどの間は利用者も少なかったようだ。ここを通ったという記録も、ほとんどなかった。どうも安心して行けるほどの道ではない、というのが理由だったようで、小林喜作も、仕事の合い間にさかんに手直しをやっている。

それにしても『日本百名山』の中で深田久弥も、はじめて槍ケ岳に登った大正十一年のことについて、「燕の方面から槍へ向ったが、まだ喜作新道（即ち東鎌）は拓かれていなかった。燕尾根から常念へ廻り、一ノ俣谷から中山峠で二ノ俣へ越え、それから槍沢に出た。」といい切っているほどであった。これが、当時の燕―槍の標準コースである。

喜作新道を通って槍ケ岳に来た人たちの中には、大正十二年に槍の北鎌尾根を征服した舟田三郎らの早稲田のパーティーがあった。当時は、北鎌尾根の初登はんと報道されて注目を集めたが、それよりも東鎌尾根が通れるということで話題を呼んだ。しかし、それにも増して喜作新道を有名にしたのは、その年の秩父宮の登山であった。槇有恒が案内して燕岳から縦走したが、随員、警備、新聞記者など五十人を越す大部隊で喜作新道を通ったから、喜作新道は大変な評判となった。七月二十六日のことで、喜作新道から殺生小屋に着いた秩父宮は、その日のうちに槍ケ岳に登頂している。おまけに、このときの活動写真が全国で上映され、宮様の登山の人気とあわせて、喜作新道が知られたのである。

それから三年して、加藤文太郎がここへ来たときには、喜作新道には、すでにアルプス銀座通りの名があったという。（登山史研究）

表銀座を行く登山者

長野県におけるトノサマガエルとトウキョウダルマガエルの分布

下山良平

田植え時のにぎやかな〝演奏家〟としてなじみの深いトノサマガエルだが、長野県では地域によって全く分布していない所もあり、そこでは代わりに近縁種のトウキョウダルマガエルが分布している。この二種は大きさ、模様、鳴き声などが非常によく似ているため、長い間混同され、同一視されてきた。

私と小野まち子氏（当時信大学生、現在教諭）は、羽田健三教授の御指導のもとで、一九七八・七九年にかけて、木曽と伊那の一部を除く長野県全域でこの二種の分布を調査した。調査では、小野氏が千曲川流域を担当し、私は犀川、姫川、関川、天竜川の流域を担当した。なお、この調査において、鳥川流域総合学術調査（中部電力依頼）、栂池総合学術調査（小谷村依頼）の調査費の一部を使わせて頂いた。

それではまず、トノサマガエルとトウキョウダルマガエルの特徴について、簡単に述べておきたい。

トノサマガエル　本州（仙台、関東と信濃川流域の一部を除く）、四国、九州に分布している。雌は背中の黒い斑紋が多数くっつき合い、背中のライン（白～緑色、特に白が多い）が太くて目立つ。それに対して雄は、全身があざやかな黄緑（または緑）の婚姻色に覆われ、斑紋は不明瞭である。

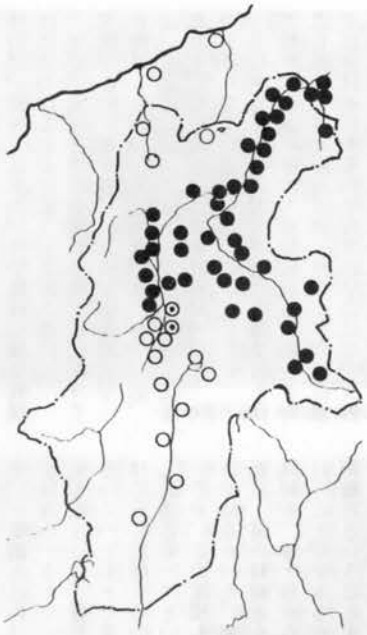
トウキョウダルマガエル　ダルマガエル（瀬戸内～東海に分布）の亜種で、仙台平野～関東平野及び信濃川流域に分布している。雌雄とも背中の斑紋は丸く独立しており、雄の婚姻色は目やこまくの周辺に限られる。また背中のラインはトノサマガエルに比べて細い。

さて次に、長野県下のこの二種の分布について述べたい。信濃川の上流である千曲川、犀川の流域では、松本平南部を除けば、トノサマガエルは全く分布しておらず、代わりにトウキョウダルマガエルが広く分布している。

ところが、分水嶺を越えた他の水系（関川、姫川、天竜川）では、逆にトノサマガエルだけが分布していて、トウキョウダルマガエルは全く見つからない（なお、未調査の木曽川と矢作川の流域では、本年度中に調査を行なう予定である）。これまでの知見から、トノサマガエルとトウキョウダルマガエルが分水嶺を境に棲み分けており、しかも松本平の一部を除いては、一方の種で独占されているということは興味深い。

調査中、何人もの農家の人たちと話をしたが、大規模な耕地整理や農薬の影響で、昔はたくさんいたカエルも最近めっきり少なくなったということで、残念に思う。

（信州大学教育学部生態学研究室四年生）



長野県におけるトノサマガエル（白丸）とトウキョウダルマガエル（黒丸）の分布、二重丸は混生地

トノサマガエルの雌

トウキョウダルマガエルの雌

友の会だより

・小鳥の声を聞く会

5月10・11日の1泊2日の日程で、50名が参加し行なわれました。

山岳総合センターに宿泊し、夜は三石紘・佐野昌男両講師のお話しを聞き、鷹狩山の頂で山菜汁で朝食をとり、清沢由之・長沢武講師の植物の説明を受けました。

・山菜と自然観察の会

鹿島槍ガ岳の麓の大谷原で開き54名が参加しました。

清沢由之・長沢武講師による食用野草についての解説を受け、昼は焼肉と山菜汁に舌つづみを打ち、各自採集した収獲物を土産にしました。

・友の会々員募集

55年度会員を募っております。年会費個人（一般）五〇〇〇円、（小・中・高生）二〇〇〇円、（ファミリー）六〇〇〇円。詳しい事は事務局（山博内）へご照会下さい。

博物館だより

・資料寄贈ありがとうございました

ニッコウムササビ
東筑摩郡明科町　丸山謙一郎　様
カルカモ　大町市平借馬　朝田芳之　様
ノウサギ　大町市神栄町　臼井由三　様

・北アルプス博物誌を頒布してます

「山と博物館」に掲載された北アに関するものを再編集したものです。（自然・民俗）（植物・地学）（動物・自然保護）各巻二〇〇〇円、送料別、申込は山博事務局へ。

山と博物館　第25巻　第6号
一九八〇年　六月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）